

おばに、絵を見せたが、笑いながら、「上手やなあ」とは、愛想でゆうてくれたが、全く、絵には興味なさそう。千円もらって家に帰る。

家に帰り、居間で僕のしょんぼりした姿を母が見て尋ねる。僕は、母に今日の事を打ち明けた。

彼女がベンチにいたが、何にもせんと、通り過ぎたと言ったら、母はあきれた顔した。

「よっちゃん、よお聞きや。

勇気のないのは、はっきりせんのは男やないよ。」と、母は言った。

すぐ、手紙を書きだす。

ああでもない、こうでもない、何回も書いた。「結局、自分の言いたいのは何か。」

予定がつまっている。明日から、九州旅行。

帰って来たら、琵琶湖の比良の別荘での自炊。会いたいけれど、当分無理や。

「八月八日の朝九時、中書島の駅でお会いしたい。今日、あなたが座っていたベンチに来てください。」書き終わったら一時前だった。